トークイベント「ハンパクがもたらしたもの」開催報告

▲トークイベントの様子

第125回ミニ企画展示関連企画「ハンパクがもたらしたもの」では、平和教育研究センターリサーチャーの番匠健一氏をファシリテーターに、1969年に開催された反戦のための万国博について、事務局を担った山本健治氏にお話いただきました。

山本氏は立命館大学卒業後、働きながら関西ベ平連の活動を行っていました。当時、山本氏の活動の原動力となっていたのは、空襲など戦争の傷がいまだ残る大阪が、ナパーム弾の材料を製造し、それによりベトナム人が空襲被害を受けていることに対して黙っているわけにはいかないという思いでした。

しかし、1970年の大阪万博が近づくと、空襲による大阪砲兵工廠の残骸も撤去され、ベトナム反戦を訴えていた作家なども万博に協力するようになりました。そのような中で南大阪ベ平連がハンパクを発案しました。山本氏は、ハンパクの出発点には、①メガイベント大阪万博への批判、②ベトナム反戦・反安保の主張、③万博が掲げる「人類の進歩と調和」と程遠い公害や基地問題などの現実の課題を語る、④大阪空襲の記憶の場で開催する、ことがあったと言います。公害や基地問題などあらゆる問題に直面している人々が集い、語る場を提供することが、ハンパクの役割であったと山本氏は振り返りました。

ハンパクの目玉の一つは、前年に九州大学に墜落した米軍機「ファントム」の残骸の展示でした。それは日本がアメリカに従属してベトナム戦争に協力し、結果として被害を受けたという関係性を象徴するものでした。警察やCIAも機会があればこれを取り返そうと

画策しており、事務局はあらゆる手段を講じて介入を防ぎました。多くの参加団体もこの点については理解を示し、無事に会期を終えることができました

来場者の中には当時「ファントム」の展示に関わった方や、ハンパクに実際に行った方もあり、ハンパクの記録を残すことの重要性や、もっと大規模な展示を開催して欲しいとの要望もありました。

質疑応答では、なぜ関西でこのように大きなイベントができたのかとの問いに、関西の各ベ平連は理論より実践が先行し、議論にこだわらずに行動できたことや、労働組合との協力関係、関西というゆるやかな地域的つながりを持てたこと、などを山本氏は指摘しました。また、参加者から、SNS で「反万博」のデモを呼びかけたが反応が無くあきらめた。なぜ当時は多くの人を集めることができたのか、との声もありました。これに対して山本氏は、ベ平連のデモでも数人しか集まらないことも多く、それでも臆せずに語りかけることで結果として広がっていった。一人でも堂々と論陣を張ることが大切だと語りました。

日時：2019 年 7 月 20 日（土）13：30〜15：30（30 分延長）
会場：立命館大学国際平和ミュージアム　2 階会議室
登壇者：山本健治、番匠健一
参加者：２７名

▲山本健治　氏